

第1学年 国語科学習指導案

1年2組 男子22名 女子17名 計39名

指導者 井田 幸佑

【授業】13:30~14:20 会場 1年2組(2階)

【協議会】14:30~15:20 会場 第1研修室(1階)

1 単元名 「少年の日の思い出」

2 単元について

(1) 単元設定の趣旨

「少年の日の思い出」は昭和22年の文部省教科書に採用されて以来、文学的文章の学習の定番教材となっており、多くの実践が試みられてきている。本作品の登場人物は生徒と同年代であり、生徒は物語の内容を自分事のように受け止めやすい。また、内面の細かい描写から「僕」の人物像や心情を読み取りやすい作品である。しかし、松本(2005)は従来、本教材の学習について「僕」の犯した罪とそれを自覚し、変容する場面に注目させることで「僕」の成長を読み取る「道徳的な読み」の指導が長い間行われてきたのではないかと指摘し、語りの構造に着目することで多様な読みにつながる可能性を示唆している。また、阿部(2019)は

「僕」は、確かに「一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟り」、自らの手でちょうを一つ一つ「粉々に押しつぶす」ことで、自分の熱情とは違った世界や価値観があることを知る。そして、今までの生き方の象徴である蝶集めと決別する。その意味で「僕」は少年時代に別れを告げ、新しい生き方に踏み込んでいくということが読める。しかし、それは「僕」がそれまでのエーミール像を対象化したり更新したりしていくというまでのものではなかった。(中略)おそらくは、大人になった今もそれを十分には対象化したり克服したりできていない。

その意味で「僕」が「大きく精神的な成長を遂げていった」というだけの解釈には大きな読み落としがあることになる。(ただし、作品そのものがそういった読み落としを起こしやすい書き方になっていると見ることもできる。)そういう切り口でこの作品を評価すると、「少年の日の思い出」という作品の評価もまた更新される可能性がある。

と指摘し、同様に「僕」の成長譚にとどまらない読みの可能性を示している。

そこで、本単元では語りの構造に着目して本作品を読み、この教材が持つ多様な読みの可能性を明らかにしていきたい。

本教材の学習においては、生徒は回想部分の「僕」がちょうを盗み、壊してしまうエピソードや終末部分にて「僕」がちょうを潰してしまう場面に注目することが多いと考える。本作に登場する「僕」は生徒たちと同年代であると設定されており、生徒は「僕」がちょうへと傾ける熱情に共感を覚えやすい。「僕」は憎んでいたと表現するほどにエーミールに対しての激しい感情を抱いており、生徒も「気味悪い性質」「悪徳」といった評価からエーミールの不気味で関わりにくい人物像を想定し、彼への態度も「僕」に近いものとなりがちである。また、「僕は悪漢だということに決まっていまい」、という表現からも読者はエーミールが「僕」を不当に扱っているように感じる。

この教材は「僕」が自ら罪を認め、その償いや少年期から脱却するきっかけとして自らの宝物であるちょうを潰す場面で終わる。生徒はその後の「僕」の成長を想起し、冒頭部分のように過去を振り返り反省することができる人物へと成長することができたと捉え、この教材を「僕」の成長譚として読むことが多いのではないだろうか。「僕」のエーミール評も「僕」の子供らしい、自己中心的な身勝手さを表すものだと捉え、「僕」とエーミールを「子供」と「大人」を象徴する存在とする考えである。

しかし、この作品の語り手を誰と見るかでその読みは大きく変わるのではないかと考える。三村(2016)は各教科書での「語り手」の解釈を比較し、

A、語り手は前半では「私」、後半では「僕」に交替している。

B、語り手は一貫して「私」あり、後半は「私」が「客」から聞いた話を語り直したもの。
という二つの解釈の存在を明らかにしている。

Aの解釈では、後半部分の「僕」の心情、とりわけエーミールに対する向き合い方やちょうへの思い、自己中心的だった自分と向き合うことに注目することになるであろう。それは、上に述べたように、精神的に成長を遂げる「僕」を捉える読みになる。しかし、そうすると前半部分の読みが甘くなってしまうのではないだろうか。「私」の振る舞いや情景の描写から「私」の人物像を読み取ったり、前半部分を「私」が語ることを意味を考えるきっかけを失ったりすることにはならないだろうか。

そこで、本単元ではBの立場から授業を展開したい。その効果は大きく分けて二点あると考える。一点目は内容面での読みの深まりである。一貫した語り手の存在を意識して前半を読むことで情景や人物の描写から読み取れる伏線を理解したり、「僕(客)」の人物像をより深く理解したりしやすくなるからである。過去の出来事は大人になった「僕(客)」の視点から「私」に語った内容を、「私」が物語全体の語り手として語っている。そう捉えると、「客」は「僕」が精神的に成長し、子供から大人になった姿と単純に捉えることはできないのではないか。エーミールを非難したり怒りを向けたりする心情が、大人として描かれている「客」の視点からの捉えであるとするならば、本当に「客」は「僕」が過去の出来事から教訓を得て成長した姿だと言えるのだろうか。二点目は「私」の存在の意味を考えるきっかけとなることだ。生徒は前半部分を、後半部分の回想を始めるためのきっかけと捉えることが多い。しかし、その機能は前半部分が「客」の語りであっても果たされる。「私」が語ることを意味考えると、そもそもそれはなぜ行われるのか、誰のために行われているのかという問いが浮かんでくる。なぜ、「私」は友人の「話すのも恥ずかしいこと」を語り直すのだろうか。その問いは「私」と「客」の関係性を捉えるきっかけになるのではないか。このように冒頭部分を再考することで、新たな気付きが生まれてくるはずである

明示的に書かれている描写にのみ注目するのではなく、多面的に読み、様々な観点から分析すること、また、それらがどのように関わり合っているかを考えることによって読みの深まりを感じさせ、文学的文章の学習の面白さを味わわせたい。

(2) 生徒の実態

生徒は中学校入学以来、文学的文章の学習においては「飛べ、かもめ」では登場人物の人物像や情景描写、「さんちき」では場の設定、「星の花が降るころに」では登場人物の役割や象徴といった観点を明らかにして読む学習を行ってきた。しかし観点に着目することはできていても、それらに関連付けて読んだり考えたりする力が十分に身に付いているとは言えない状態である。

本単元では、まずはこの教材をさまざまな観点を立てて読み、整理する。その後、それらがどう関わり合っているかを前半部分に着目して読み、それらが教材全体に対してどう影響しているのかを考えさせ、観点を立てて読み取ったことの相関に着目して読ませたい。そうすることで多様な読みの可能性に気付かせ、読みの深まりを実感させたい。

(3) 指導の構え

本単元における「深い学び」の状態は、教材全体を多様な観点から分析し、それらの関りを捉えられる、読みが深まった状態のことである。つまり、それぞれの観点が互いに影響し合い、一つの物語を作り上げていることを知り、多様な切り口から物語を読むことができるようになることが目標である。本単元で言えば、前半部分に注目し語り手の存在を明確にして読むことで登場人物に対しての見方が広がったり、行動を読み取る際にその裏にある心情を読み取ったりする活動を通して、

自分の読みを更新していくことである。

① 語りの構造が持つ効果に気付かせる工夫

この教材は大きく「前半：現在」と「後半：過去」に分けることができると考える。生徒はエピソードの印象の強さや人物の描写から後半部分に注目することが多い。また、後半部分は心情描写の細かさや臨場感から「僕」が直接読者に語っているように感じる生徒も多いようである。言い換えれば、「僕」が読者に共感を求めるような形となっているともいえる。そのような読みでは前半の「私」と「客」の会話は回想を始めるためのきっかけとしか捉えられない可能性がある。

しかし、この教材は「現在」から「過去」の出来事を語る構造となっており、あくまで語り手は「客」の告白を聞き、その内容を読者に語っている「私」であると捉えた場合、「僕」のエメールに対する評価や、自身の罪に対する向き合い方の捉え方は「僕＝子供」という捉え方とは違ったものになるのではないだろうか。また、「私」という人物の役割についても改めて考える余地が生まれる。本単元では後半部分から分析を行っていく。後半部分の人物や場の描写、変容について捉えた後に改めて前半部分を読み直すことによって、前半部分が伏線になっていることに気付かせたり、単に「成長」という言葉では表せない、「僕」の変容に気付かせたりしたい。

また、「私」が一貫して語っているという構造に注目したとき、「私」が語っていることの意義についても考えさせたい。前半部分のやり取りは「客」の目線から語ることもできるはずであり、後半部分の出来事が中心であるならばそうしたほうが「客」の心情が読者に伝わりやすいはずである。にもかかわらず、あえて「私」という他者の視点を通して語られていることにはどんな意味があるのかということである。語り直されたものであることを意識すると、読者は「僕」への共感から一歩離れ、後半部の出来事を客観的に捉えやすくなるのではないだろうか。そのことによって「客」の大人になっても残っている自己中心的な考えに気付きやすくなるのではないだろうか。また、「私」がこれを語り直すために記録していると捉えると、それは誰に聞かせる（読ませる）ためなのか。という問いも生まれる。このように観点の相関や語り手の存在、語りの構造に注目することによって読みの幅が広がりを感じさせ、自分の読みが深まっていく実感をもたせたい。

② 課題設定の工夫

本単元では毎時間スプレッドシートを用いて振り返りを行う。その際にはこれまでに学習した「人物像」「心情描写」「人間関係」「人物の変容」「場」「情景描写」「語り手」「象徴」を視点とする。これらは本年度、生徒たちが物語作品の学習で活用してきた視点である。生徒たちにはその視点から毎時の学習を振り返らせるようにする。その内容から次時の課題を設定することにより、毎時の課題が生徒にとって必要感のあるものになるようにしたい。

③ 協働して学びを深める学習形態の工夫

本単元では、学習の記録をノート代わりにスライドに記入して共有する。これは、それぞれの思考の痕跡を共有するためである。その際には②で挙げた観点が明らかになるよう指導する。また、毎時の振り返りもスプレッドシートを用いて共有する。この形態によって個で生まれたアイデアや疑問が全体のものとなる。自分の問いの答えを誰かが知っていたり、自分の何気ない考えが誰かの疑問を解決したりするかもしれない。この工夫によって生徒の問いが深く、多様なものになることを狙っている。

本時では教材の前半部分の存在がもたらす効果について意見を交流し、考えを深め、自分の考えを更新することを目標とする。そのために、自分の考えを1枚のスライドにまとめたものを第6時に制作する。それも同様に共有し、参照できるようにする。また、制作時には自由に相談や質問をできる状況を設定する。これらの工夫によって十分に自分の考えを練らせ、本時がそれぞれの考えをつなげ、多様な読みを実現する時間になるようにしたい。

3 「見方・考え方」を働かせ、「深い学び」を実現する授業づくり

文学的文章を読むうえで、人物像や場の設定といった観点の相関に着目したり、語り手の存在や構成を意識したりするという見方・考え方を働かせることによって、部分と全体の関係を捉え、物語世界を深く理解することができる。

本単元では、まずは「僕」や「エーミール」の人物像、情景描写、「ちょう」が象徴しているものなどに着目して後半部分を分析していく。これまでに学習の活かし、多くの切り口から物語世界の状況を整理させる。その上で改めて前半部分を読み、そこに書かれる伏線や語りの構造に気付くことで、大人になった「僕」が淡々と昔話をしていたわけではないことに気付き、さらに深い読みの可能性に気付くことができるはずである。

本時では、観点の相関についての見方を働かせること、語り手の存在を意識して読むことを通して教材を多面的に捉えさせることで多様な読みの可能性に気付かせ、自分の読みをより深いものにさせていきたい。

4 単元の目標

- 心情を表す語句の量を増やすとともに、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。【知識及び技能】
- ◎ 場面と場面、展開と描写などを結び付けて、内容を解釈することができる。【思考力、判断力、表現力】
- 言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。【学びに向かう力、人間性等】

5 全体計画（全7時間）

- 第1時 教材全体を通読し、初発の感想を書く。
- 第2時 エーミールの行動に着目し、人物像を捉える。
- 第3時 「僕」の行動に着目し、人物像を捉える。
- 第4時 「僕」がなぜエーミールを憎んでいるのかを、3時で捉えた内容を基に話し合う。
- 第5時 「ちょう」が象徴しているものは何か考える。
- 第6時 教材の構成に着目し、前半部分が存在することに生まれる効果を「内容」と「語りの構造」の二点から考え、スライドにまとめる。
- 第7時 前半部分を再考し、全体を捉え直すことにより、自分の読みを深める

6 本時の学習（全7／7時間）

（1）指導目標

人物像、情景描写、象徴などの観点の相関、作品の構成がもたらす効果について考え、自分の読みを深めることができる。

（2）展開

学習活動と予想される生徒の反応	指導上の留意点
1 前時を振り返り、課題を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> 前時には課題についての自分の考えをまとめるスライドを作成したこと、本時はそのスライドを活用しながら話し合い活動を行うことを確認する。
<p>「少年の日の思い出」前半部分に注目すると何がわかるだろうか。</p>	
<p>2 観点を明らかにしながら自分の考えを共有し、それらがどのように関わり合っているのかを話し合う。</p> <p>○「場」について。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「僕（客）」にとって話しにくいことがある場面では暗さの描写が強調されている。その中で、ちょうは光っているような描写が多い。 「客」が闇の中から語る様子は過去の出来事への後悔を表しているのではないか。 <p>○「人物像」について。</p> <ul style="list-style-type: none"> 過去の「僕」は自分勝手な人物であったが、現在はある程度他人を思いやることができている。 「僕」は、過去ではエーミールに、現在は「私」に対して感情的な態度を示している。 「客」は大人になった「僕」のはずだがエーミールのことを「あいつ」と呼ぶなど、感情的な面を変わらず持っているようだ。 	<ul style="list-style-type: none"> どの要素に着目したかを明らかにして発表させる。また、自分の考えが他の考えとどのように関わっているかを説明させる。 発表者のスライドを自分の chromebook で確認しながら話し合う。板書は教師が写真で共有することとし、視写は行わず、話し合いに参加するよう促す。 全体を通して暗さについての表現が多く用いられていたことを確認する。 冒頭と終末部分が暗闇の中での出来事であることを確認する。 少年の頃の「僕」からの変化を示す描写がある一方、チョウを前にして冷静さを失っている様子や友人に対する振る舞いなど、子どもらしい存在として描かれていた「僕」の要素も変わらず持っていることに気付かせる。 「僕」と「客」の人物像が「子ども」「大人」という対比のみで語れないことに気付かせる。

○「象徴」について

- ・「僕」はちょうを潰して少年時代から大人へ近づいたはずなのに、大人になっても感情的な部分がある。
- ・大人になっても「僕」がちょうへの思いを強くもっていることから、潰したことの重大さがより伝わる。

3 「語りの構造」に着目したとき、どんなことが読み取れるかを話し合う。

○「語り手」について。

- ・語り手である「私」の存在を意識して読むことで、「客」の話を一歩引いて読むことができた。
- ・「私」は「客」の話を、誰かに語るつもりで記録したのではないだろうか。
- ・「私」は「客」の話を聞いて、「客」の幼稚さに気付き、それを「客」に分らせるためにこの文を書いたのではないか。

○「人物像」について

- ・「客」は「私」に話して罪の意識を軽くしたかったのではないか。
- ・「客」の話を冷静に聞く「私」の姿がエーミールと重なった。
- ・「私」は「客」の話に納得していないから、語り直しているのではないか。

4 話し合い活動の振り返りを行い、学んだことを共有する。

- ・「僕」が自分のちょうを潰したのは大人へと成長するためだと思っていたが、改めて前半を読むと子供時代とあまり変わらない様子が読み取れた。
- ・闇の中に隠れて語るのは過去と向き合っていないからではないか。
- ・前半部分は回想のきっかけのためにあると思っていたが、考えを広げるきっかけが多くあった。
- ・語り手の存在を意識して読むことで、この作品全体がもつ構成について考えを深めることができた。

- ・終盤ではチョウを潰し、子どもから大人へと成長しようとする様子を見ていた「僕」だが、大人となった現在でも過去の出来事を整理しきれていないという点に気付かせる。

- ・本単元では、本作品の語り手は一貫して「私」だという立場から考えることを確認する。
- ・「私」という語り手はなぜ「客」の話を語り直すのかを考えさせる。その際には「私」の気持ちだけを考えないように、根拠をもって考えるよう指示する。

- ・本時の学習を通して新たに気付いたこと、それまでの考えから変わったことについて自分のスライドの加筆・更新を行う。
- ・自分の考えの変化を振り返るために、更新する際には当初の考えを削除せずに残しておくように指示する。
- ・記述後に数名を指名し、発表させる。

<p>5 本単元の学習全体を振り返り、考えの変化を共有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エーミールは嫌な人物だと思っていたが、冷静で落ち着きのある人物だった。 ・「僕」の反省が印象に残っていたが、前半部分を捉え直すとそれがどれほど真剣なものだったかわからなくなった。 ・終末から冒頭に続く流れを意識すると、「僕（客）」の人物像をより深く理解することができる。 ・「僕」の視点でエーミールを見ていたことに気づき、改めて彼の人物像を捉えることができた。 ・すっかりしない部分が多くあると感じていたが、「僕」と「客」の関連を意識することで、成長だけでは語れない、人の変容に気付くことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スプレッドシートに各自記入させ、数名を指名し、発表させる ・初発の感想や授業の記録を確認させ、疑問が解決した点や捉え方が変わった点を記入させる。 ・複数の観点からの読みを関連付けることで、読みが深まったり、新たな視点を持ったりできることを確認する。
---	---

(3) 学習評価の観点

- ・人物像や場の設定といった観点の相関や語りの構造に着目して前半部分を読み直すことを通して、物語全体に対する読みを深めることができる。【思考・判断・表現】(発言・スライド・スプレッドシートの記述)

7 授業観察の視点

- ・観点到注目して教材後半の内容を整理した後に、それらの相関を踏まえて前半部分を再考することや、語りの構造に注目して全体を読むことは、読みを深めるために有効であるか。
- ・共有したスライドを用いて考えをまとめ、更新していくことは、協働的な学びを実現するために有効であるか。

[主な参考文献]

- ・ 松本修『「少年の日の思い出」における語りの構造』2005 Groupe Bricolage 紀要
- ・ 阿部昇『物語・小説「読み」の授業のための教材研究』2019 明治図書
- ・ 三村孝志『「少年の日の思い出」の「語り手」—語り手のとらえと学習の手引き—』2016 全国大学国語教育学会 第130回新潟大会研究発表要旨集
- ・ 河野庸介『国語科授業にスリルとサスペンスを』2010 教育出版
- ・ 松本修・佐藤多佳子・桃原千英子編著『中学校国語科 続・その問いは、文学の授業をデザインする』2022 明治図書